

幼児の創造性について

恩 田 彰



幼児の創造性とは何かということを検討するさい、まず創造性とは何かについて考え、その上で幼児の創造性の特徴について考察してみたい。

一、幼児の創造性の特徴

創造性の定義はいろいろな人がそれぞれの立場で行なっているが、そこに共通する主な点について考察してみたいと思う。

(1) 自己実現の創造性

マズロー (Maslow, A. H.) は創造性を「特別な才能の創造性」と「自己実現の創造性」にわけている。前者は天才とか科学者、発明家、芸術家などの特殊な人たちの持っている創造性で、社会

的に新しい、価値あるものを生みだす。これに対し後者はだれでも持っているもので、ほかの人にとっては新しくないが、その人にとつて初めてといった活動と、社会的に価値あるものとされないが、その人独自の個性的な活動を生みだす創造性である。その場合後者は、一つの領域における経験を専門的に深めることにより、前者への移行が可能である。そこで幼児の創造性は後者に属する。これが成長と教育とによつて「特別な才能の創造性」へと発達していくのである。

(2) 能力としての創造性

これは創造性を新しいものをつくりだす能力、すなわち創造力としてとらえる見方である。最も一般的にとられている定義であ

る。この場合新しいものといって、幼児にとって新しいという意味で、社会的に価値がなくてもよいわけである。

(3) 知能と創造性

知性すなわち知的能力は、いままで知能という概念またはそれを測定する唯一の道具としての知能検査が測定する知能ということとで代表されてきたが、これだけでは十分に知性はとらえられないのではないか、また、現在の知能検査は十分に知能を測定してないのではないかという批判から創造性が登場してきたわけである。創造性の概念は、従来の知能検査の測定する知能とは、一見反する特徴を持っているが、実は知能検査研究に基づく知能ではとらえられなかった知能の別の面を明らかにしたものであって、現在は知能と創造性を対置しているが、将来いっしょにして知能とよんでも、また別名でよんでもさしつかえないと思われる。

それでは創造性は知能とどちらがうのであろうか。これにはまず知能と思考との関係から考えなければならぬ。今まで思考の研究といえば、主として論理的思考を中心として研究してきた。知能検査でも、主にこの面をとらえてきた。しかし創造的思考の研究には未開拓なところが多い。

しかし創造的思考は決して論理的思考に対するものではなく、それを含むものである。ブルナー(Bruner, J. S.)らは、「教

育の過程」において「発見学習」を提唱し、いままで分析的思考が重視され、直観的思考が軽視されてきたことを警告し、その重要性を強調している。筆者は創造的思考は、この直観的思考と分析的思考とが統合されたものであると考えている。

またギルフォード(Guilford, J. P.)は、「思考を集中的思考と拡散的思考の二つに分けているが、前者は課題を分析することによって、解答が論理的に導かれる思考であり、後者は思考の方向がどのようにも変わっていく、広がりをもった思考である。知能は主として集中的思考に関係し、創造性は拡散的思考に関係をもっている。そこで従来の知能テストは主として論理的思考、集中的思考を測定してきたが、それに対して創造性テストは直観的思考、拡散的思考さらに創造的思考を測定しようとしている。

しかし現在のところ創造性テストは、創造的思考を十分に測定していない。知能テストと創造性テストを実施した結果によると、知能が一定水準以上になると、創造性と知能との相関が低く、幼児期および児童期、または知能が平均値以下のような場合は、創造性と知能とは未分化であり、発達につれて次第に知能と創造性が分化していくものと思われる。そこで幼児の場合知能テストで知的優秀児を見出すことができるが、一定の知能水準(平均値)以上では、知能指数の高さが知的優秀性の程度を必ずしも

示すとは限らない、その点創造性を考慮しなければならない。成人の場合、この傾向がとくに顕著になる。

(4) 創造的思考と創造性

創造性は現在、創造的思考の機能として説明されるが、創造的思考をもう一度考察してみると、創造的思考は思考と想像との中間過程であるということが出来る。創造的思考と創造性の関係を図式的にあらわすと、次の通りになると思う。この場合創造的思考と創造的想像は、その区別はむずかしく、ほとんど同じものと考えてよい。



幼児期は、後にのべるように創造的想像の原型である想像が思考と比較してより優位に発達する時期である。

(5) 人格特性としての創造性

創造性の定義は、大別すると、先にのべた能力としての創造性と人格特性としての創造性にわけられると思う。創造性には単に能力概念では包括できないものがある。たとえば創造性は知能とくらべて、情意的傾向が強く、動機づけと関係が深い。

創造性は人格特性の面からいろいろ考察されているが、たとえ

ば次のような特徴があげられている。あいまいさの寛容、非同調性、自己主張、支配性、衝動的、感情的、好みが複雑、好奇心、勤勉、熱中性、根気、積極性、冒険的、感受性が強い、自我の強さ、自発性、独立性、習慣にとられない、さううつ質、独自性、献身的などがある。これらを見ていくと、幼児の特徴と思われるものが少なくない。これらの特徴をどのようにまとめていくかが、今後の研究課題である。創造性は単一の人格特性ではなく、いくつかの因子によって構成されている複合的なものである。

つきに人格特性としての創造性の定義を二、三示そう。モレノ (Moreno, J. L.) によると創造性は適切性をもった自発性である。バロン (Baron, F.) は創造性を生産的非同調性、ペピンスキー (Pepinsky, P.) は生産的独立性といっている。こういう見方からすると、創造性は社会的自発性であるという見方もでてる。

こうしてみると、創造性は子どもを放任しておけば伸びるのではなく、適切に方向づけられ、訓練されることによって成長するものである。

(6) 創造性テストに基づく操作的定義

創造性の定義については、いくらでも論議はでてくるが、これを生産的にするには、実証的研究を進めていく必要があると思

う。それには創造性テストによるアプローチがあるので、知能の操作的定義と同じく、創造性テストが測定する対象(測度)を創造性と名づけることができると思う。この研究には、ギルフォードをはじめとして、ゲッツェルスとジャクソン (Getzels, I. W. and Jackson, P. W.)、トランス (Torrance, E. P.) やマッキンノン (Makinnon, D. W.) らによって行なわれている。現在筆者たちの開発している創造性テストは、小学校高学年以上から成人まで適用できる。しかし幼児用としては適當ではないので、今後そのための創造性テストを作成したいと思っている。

二、幼児の創造性の発達

創造性は知能と比較して一様には発達せず、多少のデコボコがでている。トランスの研究によると幼稚園から小学三年までは急速に伸びるが、三年から四年にかけて、また六年から中学一年にかけて下降し、それ以外は上昇するという。このことは低学年から高学年へ移るさいの切り換え、環境の変化、教科内容の増大、複雑といった文化の変化に原因があると思われるが、まだはっきりしたことはない。

次に幼児期の創造性、とくに幼児期の特徴である想像、あるいは創造的想像の発達の状況について考察してみたい。

リボー (Ribot, I. A. 1906) によれば、幼児期では想像力と思考の一種である推理力の成長とが拮抗している。想像力がまず成長し、それにやや遅れて推理力がゆっくりと成長する。それがやがて拮抗するようになる。この後推理力が想像力よりすぐれるようになる。

アンドルー (Andrew, E. G. 1930) によれば、想像の能力は四才と四才半との間に一番発達し、五才頃には急に落ちることが発見されている。なお創造的想像の能力は、三才と四才半に頂点を達し、五才頃になると低下するという。

グリッペン (Grippen, V. B. 1933) は、創造的想像は五才以下では、めったに働かないと述べている。またマーキー (Markey, F. V. 1935) は、小学校へ入る前は想像的行動は年令とともに多くなることをのべている。

またリゴン (Ligon, E. M. 1957) は、誕生から十七才に至る想像の発達の年令別の特徴をしらべた。つぎに乳幼児期の創造性とくに想像力の発達とその指導の要点について、リゴンの研究に基づいてまとめてみよう。

(1) 誕生から二才まで

子どもは生まれてから一年の間に、想像が発達しはじめる。乳幼児はまず事物の名前をたずね、音やリズムの再生を試みる。ま

た物をつくった時、これに名前をつける。日常のきまったことは予想ができ、興味あることは楽しみに待つことができるようになる。子どもは事物を見、接触し、味わうことよって新しい経験をすることを欲する。このように子どもは非常に好奇心を持っているが、その衝動の表現のしかたは、子ども自身の独自の特徴によつて異なる。まず接触することができるものと、できないものを早くも区別することを学ぶのである。

この時期の創造性は、いろいろな方法でその促進を刺激される。想像は簡単なゲーム、積木、人形などによつて刺激されるが、子どもの探索の欲求は、それがみたされるように遊びの環境を安全にしてやること、すなわち危険なものや触れさせたくないものを除去してやるのである。さらに親が子どもといっしょに遊んだり、子どもの探索を奨励するようにしたいものである。ことばがわかるようになったら、事物について歌で教えてやるとよい。

(2) 二才から四才まで

この時期の子どもは、直接経験とことばの遊びと想像的遊びの経験の繰り返しによつて外的世界を学んでいくものである。幼児は自然の驚異に感動する。子どもの注意時間は短く、ふつうは手当り次第に活動を変えていくものである。この頃になると基本的な生活習慣の形成と相俟つて、自律性が伸びはじめ、ひとり物事

をやることを欲するようになる。このことは子どもが自分の能力への自信を伸ばしていくのに役立つ。子どもの好奇心は、さらに高まり、時々大人を困らせるような質問をするようになる。子どもは自分の世界を発見しながら、それを処理していく仕方を知っているのである。しかし恐怖の体験は、新しい事物の発見の能力の自信をぐらつかせることもある。子どもたちは自分たちの能力の限界を試しているので、時には能力以上のことを試みて、失敗し、欲求不満を起こすことが少なくない。

この時期の子どもには、想像によつていろいろなものになるおもちゃや道具があてがわれることが望ましい。子どもにとつて積木、砂や粘土は、できているおもちゃより想像力を刺激するものである。また成長する草花、どんどん大きくなる犬や猫、秋になつて美しく色づく葉などを見て、自然の驚異に感動する経験を、親が子どもとともにしていくことは、非常に大切なことである。子どもが時には自分の能力を無視したことをやっけても、ひとりで物事をしようとする意欲は認めてやり、それを激励することが必要である。たとえ子どものやるが遅く、不正確であっても、辛抱強く、これを見守っていくことが大切である。子どもが新しいものを発見した喜びを親がともに喜ぶようでありたい。このことによつて子どもが新しいものを発見することを楽しむよう

になるのである。また危険のない限り、できるだけ子どもに探索の自由を与え、新しい経験をたくさん持つことができるように環境を整えてやる必要がある。

(3) 四才から六才まで

四才から六才までの大部分の子どもは、すぐれた想像力を持っているが、五才頃を中心として、年令とともに想像力を一時減少させる傾向が見られる。これは後ほどふれることにする。

この時期には計画能力ができて、遊びや仕事をあらかじめ予想して計画することを楽しむようになる。子どもの好奇心は大人を困らせるようなこともあるかもしれないが、真実の探索を抑えないようにすることが必要である。この頃になると事物の関係の理由はわからないかもしれないが、個々の事物を関係づけることができるようになる。想像的な遊びで、いろいろな多くの社会的地位と役割を体験する。また今まで自我と他我との未分化の状態から分化し、他人の存在を意識し、自己の他人に対する影響を認識するようになる。新しい経験、遊びにおける創造活動を通して、自己の創造力に自信を持つようになる。この頃は、子どもの創造活動を大人の価値基準だけによって評価してはならない。子どもはお店屋さんごっこ、学校ごっこ、おままごとのようなごっこ遊びによって、想像の中で遊びを楽しむものであるから、そのため

の道具を用意してやることも必要である。生活や遊びの計画をたてる場合に、子どもにも自分の考えをださせ、それがたとえ幼稚なものであっても、ときにはとりあげてやるとよい。自分のことは自分でやる習慣をつけるには、一人遊びに想像力を用いることをほめてやるとよい。この時期の子どもの質問には、簡潔で、直接的で、しかもわかりやすい返答をしてやるべきである。

リゴンは真実の探索には、恥ずかしさと罪悪感という意識を持たせるような禁止のしかたをしてはならないとのべている。親や教師は子どもの新しい事物の発見を喜び、これを援助してやるべきである。この頃は衝動的なところがあるが、このエネルギーを意図的、計画的に発散させてやる必要がある。これによって創造性が開発されるのである。

五才頃になると、なぜ想像力が減退していくのであろうか。精神分析ではこの頃から十二才頃に至るまでの時期を潜伏期と称する。それは一時本能的欲求が抑圧され、外的世界に興味を持ちはじめ、その中に秩序や法則を認めるようになる時期である。これは幼稚園の保育や小学校の教育によって促進されるが、このために想像力が抑えられないように注意する必要がある。この幼児の想像力は、抑えつけずに、適切に訓練することによって、創造性をのばしていくことが必要である。

(東洋大学)